慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.108- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 14 号（2009）

親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立

Formation and Establishment of the Memory on Shinran's Exile in Naoetsu

由谷　裕哉

１．問題の所在

本稿は、浄土真宗の開祖･親鸞（1173－1263）の越後配流時の配所と現在認識されている新潟県上越市直江津地区における二つの宗教施設が、旧蹟と位置づけられ始め、やがてそれが定説化してゆく経緯を、記憶の生成と確立の過程として考究しようとする。なお、紙幅の制約もあり、本稿ではとくに記憶の確立、すなわち社会的な共有に力点を置く。

ここで記憶という術語を使用するのは、アルヴァクスに遡る記憶の社会学的考察、とくに過去に関する態度のうち歴史を客観的、記憶を主観的なものと捉える二分法を意識しているからである（Halbwacs 1950=1989：86-99）。詳しくは後述するが、本稿で扱う事例である親鸞の越後配流に関しては同時代史料がほぼ不在であること、また最も古いこの事件への言及が曾孫・覚如（1271－1351）の著した聖教（しょうぎょう）（真宗門徒にとっての聖典）の類においてであることなどから、20 世紀に入って真宗教団内部の歴史研究において実証史学的姿勢が一般化すると、越後時代の親鸞は史実に値しないと見なされることになった。

したがって、このテーマを歴史研究として扱うのではなく、むしろ教団、門徒、その他参詣者が共有する越後配流時代の親鸞にまつわる記憶と捉え、そうした記憶の社会的形成と共有に焦点を置くことの方が、上記の実証史による評価とも矛盾しないと筆者は考える。

記憶という枠組を使うもう一つの理由は、宗派開祖の旧蹟という問題が、近世史･近代史研究において近年注目されている史蹟論やコメモレイション論､顕彰研究[1)]と通底するからである。本稿はこれら先行研究に追随するものではないが、これらの研究のうち明治以降に関するものが、史蹟や記念碑の成立（メモリー）と国民国家形成に伴う国民統合とを関連づけて位置づけていることは注目される。つまり、記憶の社会学という枠組をとることにより、こうした左派的な傾きのコメモレイション研究を相対化しうると期待できるのである。冒頭で述べたように、本稿で記憶の生成より確立にむしろ重点を置く理由が、ここにある。

以下本稿では、第２節で親鸞の越後配流時において配所であったと現在考えられている二つの宗教施設を中心に、事例全体の概観を行う。第３節では親鸞の越後配流にまつわる、いわば記憶の生成に関して近世の親鸞伝や祖跡巡拝記を追跡し、第４節においてそれが 20 世紀における実証史学の勃興によって払拭される経緯、および 1960 年代頃までの真宗史研究によりその振り子が元に戻される経緯を、併せて概観する。

続く第５節で、第４節後半で見た真宗史研究者とも応え合う地元の郷土史家たちが、近世に提唱された旧蹟を再発見し、正統的な記憶として新たに意味づけてゆく過程を追跡する。以上を踏まえ、第６節で本事例における記憶の生成と確立についてまとめたい。

２．事例の概観

まず、新潟県上越市の直江津地区で、親鸞が越後配流時に関係していた施設であると観光案内などに現在記されるのは、次の五箇所である。添付した概念図も参照されたい。

① 親鸞聖人上陸地と見真堂（けんしんどう）：居多（こた）ヶ浜に大正 14 年（1925）、彦根の人が「親鸞聖人上陸の地」なる碑を建てたことを発端に、真宗大谷派関連の堂や碑が建ち並び、公園化したスポット。コンクリート造りの見真堂の「見真」とは、明治天皇から追贈された親鸞の諡号で、堂内に親鸞木造を安置する。堂の手前側に、東本願寺 25 世浄如筆による『御伝鈔（ごでんしょう）』からの抜書の石碑、大谷派の学僧・金子大栄（1881－1976）筆による「念仏発祥の地」の石碑がある。つまり、大谷派によって大正以降に作られたコメモレイション群ということになるが、居多ヶ浜は近世後半から親鸞が漂流した地とされてきた[2)]。

② 五智国分寺：①から東南方向に徒歩５分位の所にある天台宗寺院で、境内に親鸞配流当初の配所を継承すると伝える「竹之内草庵」を有し、中に自刻とされる親鸞聖人座像を安置する。本稿で考察する事例の一である。寺としても『親鸞聖人越後配所草庵縁起』を発行し、天台宗ながら親鸞の配所であったことを主張している。この他境内の周囲に、親鸞が日常的に使ったという「養爺（ようや）清水」、先の自刻像を刻むために自らを写したという「鏡ヶ池」があるが、当地に国分寺が再建されたのは上杉謙信以降である。

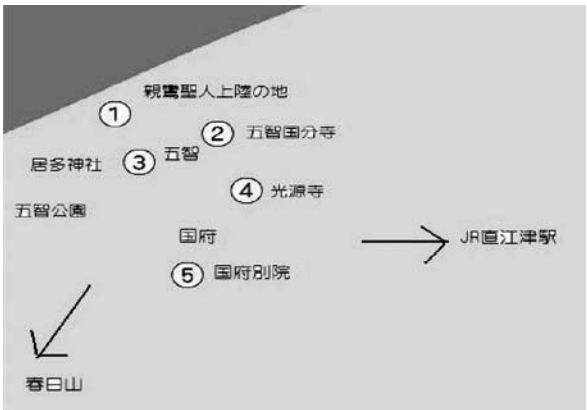
③ 居多神社：②の西側に隣接する神社で、越後一宮であったとされる。境内に親鸞聖人像があり、近世から親鸞が居多明神と何らかの関わりをもった伝承が語られる場合があった。現在の観光案内では、親鸞が居多ヶ浜に着岸後に参拝した神社と紹介される。

④ 光源寺：②の東南方向にある大谷派寺院。もと木曾義仲の遺臣で、親鸞の弟子となった最信が開いたとされ、親鸞が罪を許された時に自ら描いたという「流罪勅免御満悦御影」などを寺宝とする。居多神社より以上に、近世期の親鸞伝や二十四輩（にじゅうよはい）（関東における親鸞の弟子が開いた寺院）巡拝記において常套的に言及される。裏門近くに「配所国府御坊」の石碑があるが、観光案内の類では配所という主張がほとんど触れられない。

⑤ 国府別院：②③などから南にやや離れ、ＪＲ北陸本線近くに位置する浄土真宗本願寺派の別院。旧称は小丸山別院。17 世紀後半頃から親鸞旧蹟の地として知られていた[3)]。現在の建物は文化２年（1805）とも明治以降ともいわれ、現称となったのも昭和５年（1930）からの由だが、観光案内類では、親鸞が恵信と結婚後に暮らした配所「竹ヶ前草庵」の跡地であるとされている。本稿で考察する二つ目の事例である。

以上五箇所は、徒歩でも半日以内で回ることができるため、篤信の真宗門徒に限らず一般市民のハイキングコースとなっている。そのため、上越観光コンベンション協会制作の観光案内

――『上越そぞろ歩き』『文化財でめぐる ゑしんと親鸞』『港町、直江津さんぽ』など――が利用に供されているが、そうした観光客向けのリーフレット類においても②と⑤が越後配流時代の親鸞配所と明記されている[4)]。本稿においては、このように②と⑤が史実上の親鸞配所であるという記憶が生成・確立した経緯に、注目することになる。



３．親鸞の越後配所にまつわる記憶の生成（13 世紀および 17－18 世紀）

そこで、親鸞の越後配流および配所にまつわる記憶の生成を追跡することから始めたい。通説では、この配流を以下のような史実として説明している。

親鸞は建永２年（1207）、専修念仏の停止により師の法然らと流罪に処せられた。この点は史料的裏づけがあり史実と解釈するのが一般的だが、親鸞配流の地について記す同時代史料は存在しない。これに関する最も早い記述は、永仁３年（1295）に原本が成立したと考えられている覚如の『御伝鈔』における、以下の文言だとされる。

鸞聖人罪名藤井善信、配所越後国国府（後の二字は添字）

『御伝鈔』とは、親鸞の伝記絵を掛軸にした『御絵伝（ごえでん）』の詞書であり、現在でも報恩講などに際して真宗門徒が拝読する、聖教となっているものである。同じ覚如による『拾遺古徳伝』にも、類似した表現が見られる。なお、覚如による様々な言説の教団史における意味は宗門の研究者を中心に研究がなされているが、本稿で詳しく検討する余裕はない。

そのため、なぜ覚如が親鸞の配所を越後国府と位置づけたのかに立ち入ることはできないが、実際に親鸞が配流されたとしても、その先が越後国府だったとする情報は、配流の 90 年近く後の覚如による記述を起点とする、ということを確認しておきたい。しかも、これら史実の裏づけとしがたいテキストにさえ、上述の②から⑤は一切触れられていない。

次に近世のある時点において、こうした親鸞の越後配流にまつわる記憶が、覚如の両テキストで言及されていない直江津居多ヶ浜周辺に生成してくる経緯を見たい。

中世末頃から次第に、親鸞の越後配流時代に関わる伝承が語られ出す。例えば、本願寺第８世・蓮如の孫である顕誓（1499－1570）の『反故裏書』に、親鸞の越後七不思議として現在知

られる奇瑞の一である、下越鳥屋野（とやの）の逆さ竹（親鸞が竹の杖を地面に突き刺した所、杖から根が出て逆さの枝が生えた）の原形のような挿話が見られる。もっとも、この時点では親鸞と上越地方、なかんずく居多ヶ浜周辺とは一切関係づけられていない[5)]。

しかし、江戸期に入り『御伝鈔』の注釈書やその形式を踏まえた親鸞伝が次々と刊行される中で、前者で越後国府の場所が考証され始め、それを受けて後者では同国府における配所やそこでの生活が注目されるようになる。その経緯を、現在翻刻本で利用できる代表的なテキスト――平松令三[1975]、細川行信[1974]、新編真宗全書刊行会[1975]、真宗史料刊行会[2007][2008]、真宗典籍刊行会[1976]――を対象に、調べてみることにした。

その結果、越後国府の場所の考証からさらに進んで、竹ノ内と竹ノ鼻（もしくは竹ガ鼻、竹鼻、など）という二所の配所が語られるようになるのは、今の所、越中願楽寺宗誓が著し元禄７年（1694）に刊行された『親鸞聖人御直弟諸国散在記』（新編真宗全書刊行会 1975：15-16）を初見とすることが分かった。そこでは、Ⓐ親鸞は配流当初、竹ノ内草庵で暮らした、Ⓑその後、大場村の竹ノ鼻という地にも滞在した、という二点が要点となっている。

そこで以下に、上記テキストより当該箇所を抄出しておきたい。

一　聖人夫ヨリ国府ノ竹ノ内ト申ス処ニ御座ヲ占給ヘル御旧跡、今ハ国分寺津梁院ノ境内ニアリ。其跡ニ御木像堂アリ、此御木像ハ祖師ノ御影ト彼寺ニ申キ。（中略）

一　同国府ノ近辺大場村ノ西ニ竹ノ鼻ト申所ニ聖人御座ヲ占玉フトテ、其旧跡ニ石塔二ツアリ、東西ヨリ立故ナリト云々。

引用箇所に見られるように、Ⓐについては現在の五智国分寺（前節の②）のことだと説明されており、Ⓑも現在の国府別院（同⑤）境内に残る「石塔」二基が言及されている。

以上のように 17 世紀末において、現・五智国分寺内の「竹ノ内」と現・国府別院の地の前身であった「竹ノ鼻」という両所を、配所としての親鸞旧蹟と見なす言説が登場したと考えられる。13 世紀初頭のこととされる親鸞の越後配流時代を巡る、記憶の生成である。

さらに、同じ宗誓による宝永８年（1711）刊の『遺徳法論集』（細川行信 1974：595）、その少し前、元禄 13 年（1700）刊の天旭作『捃聚抄』（新編真宗全書刊行会 1975：106）や、やや時代が下るが明和８年（1771）刊の先啓作『大谷遺跡録』（細川行信 1974：685）などでも、両配所に関して似た記述がなされているので、祖師および二十四輩の巡拝者にとって両所が祖師配所の記憶として共有されるに至った、と考えることができよう。

こうした記憶が生成してくる背景を追究することに筆者は関心をもたないし、歴史学的なディシプリンをあえて避けて記憶という枠組をとる立場からも、生産的とは思えない[6)]。とはいえ、宗祖の旧蹟を訪ねること前後七回に及んだという宗誓のみならず、似たような描写をした天旭（伝不明）や先啓ともども、祖師の旧蹟を熱心に訪ね歩くことを自らのライフワークとした人物であると考えられ[7)]、そのようなタイプの著述家が相次いで登場したことが、祖師旧蹟をコメモレイションとして記録した出版の背景にあったのだろう。

４．越後配所にまつわる記憶の否定と再評価（1910 年代から 1960 年代まで）

ところが、このように 17－18 世紀に篤信門徒の間で共有されることになった直江津における祖師配所にまつわる記憶は、20 世紀に入って宗門内に実証史学が制度化してくると、一転して否定されるようになるのである。この問題を考えるため、越後時代の親鸞に言及のある代表的な真宗史文献を表にまとめてみた。まず、その戦前分から見たい。

すなわち、大谷大学の第三代学長であった佐々木月樵（1875－1926）が表の『親鸞聖人伝』を著した 1910 年頃までは、親鸞伝における史実と伝承との区分を明確にしないまま受容していたと考えられる。佐々木は他にも、19 種類の多様な親鸞伝を史料批判することなく、『親鸞伝叢書』（1910）として編集刊行している。

ところが、佐々木の両著作とほぼ同時期に原型が出された九州帝大の長沼賢海『日本宗教史の研究』（1928）や、宗門の中澤見明『史上之親鸞』（1922, 再版 1933）を皮切りに、かつて通説化していた親鸞伝の史実性を疑う研究が登場してきたのである。

このうち長沼は、「斯の如くして三材料（教行信証奥書、拾遺古徳傳、御絵伝、の三者：引用者注）に現はれたる、親鸞史傳の中枢とも云ふべき法然との関係、特に越後流罪の事は、頗るあやしきものなり」と記している（長沼賢海 1928：202）。

中澤は覚如の親鸞伝絵を含む著作の史実性について、覚如がそれらを著したのは本願寺の正統性を宣言する手段としてであったのだから、むしろ創作と考えるべきだという観点から立論している（中澤見明（1922）1933：30-42）。

このような動向は、大谷大の山田文昭（1877－1933）や日下無倫（1888－1964）らへと続く、真宗史研究における一種の実証主義時代の到来と解釈できる。

以上のように、1910 年代以降両大戦間にかけて宗門系の真宗史学者を中心に、覚如を典拠とする親鸞伝の史実性を疑う動向が主流になるにつれて、上越直江津に関して 17－18 世紀に生成した竹ノ内および竹ノ鼻草庵という祖師の配所に関する記憶は、学術の名の下に否定されることとなったのである。

しかるに、多様な親鸞伝の受容から実証主義に保証された史実の抽出へ、と真宗史研究が転換する渦中の大正 10 年（1921）に、新潟県出身の鷲尾教導が西本願寺において、親鸞の妻とされる恵信が越後から京都に住む娘の覚信に当てた 10 通の手紙、通称・恵信尼文書を発見した。先にも概観した山田・日下らの真宗史研究、また敗戦後の梅原真隆『恵信尼文書の考究』（1957 年）も、これを踏まえたものとなっていた。この書簡の発見は、親鸞が越後に滞在していたことの傍証となり、戦前におけるそのことへの不可知論は揺るがされることになったのである。

しかし、恵信の書簡を活用して具体的に越後時代の親鸞を考察し始めたのは、いずれも 20 世紀初頭の生まれで 1950 年代から 60 年代にかけてこの分野の著作を著した、富山大の梅原隆章（真隆の息）、大谷大の藤島達朗、龍谷大の宮崎圓遵、文化庁―鶴見大―上越教育大の松野純孝、京都大―大谷大の赤松俊秀であったと考えられる。彼らを中心とするアカデミー側からの

越後真宗史への言及についても、表の下側に概観しておいた。

一方で新潟県の郷土史研究における親鸞への注目は戦前からだったが、量的にも質的にも新潟の郷土史に影響を与えた真宗史研究は、おそらくこれら五人の真宗史学者によるものではないかと考えられる。というのも、彼らが同時代の新潟の郷土史家たちと親和的だったのは、その言説に次のような共通性があったからだと考えられるからである。

まず親鸞の妻帯について、戦前には妻三人説（中澤の上記著作の他、藤原猶雪[1938]）もあったのに対し、この五人の学者は恵信ひとりと見るか（梅原・藤島・松野）、もしくは越後下向直後の初婚と併せて二回と見る（宮崎、赤松もこれと似た二人もしくは一人説）など、良き家庭人としての親鸞像を越後時代に関して描いた。

一方で恵信像についても、越後出身もしくは越後での親鸞との結婚を説くものが多く、当地の郷土史家から親近感の持てる存在として描かれていたと考えられる。そして、何よりもこれら五者全てが、常陸稲田での生活の後で親鸞が帰洛した際、恵信がそれに付き従って上洛したと見ている。つまり、いわば良き坊守としての恵信像を描いていたことが、これら 1950―60 年代の研究に共通する。

さらに、本稿の主眼である親鸞の越後配流そのものに関わる議論では、必ずしも厳密な検証が伴ってはいなかったが、これら著作の多くが（山田―日下らの研究までは決して断言されなかった）親鸞が配流され、しばらく配所として留まっていた地を上越であると想定したこと（明記しているのは、藤島・松野・赤松）も、新潟県とくに上越地方の郷土史家に親近感を持たれる見解であったと思われる[8)]。

表：越後時代の親鸞に言及のある，代表的な真宗史文献リスト[1960 年代頃まで]

刊行年	著者名	書名	越後時代の親鸞の位置づけなど
1910	佐々木月樵（げっしょう）	親鸞聖人伝	宗門で実証主義的動向が興る直前の研究。越後の親鸞旧蹟についても、自らの旅行記に加えて多様な伝承をほぼ等価に列挙
1916	村上専精（せんしょう）	真宗全史	実証主義的なアプローチの先駆の一か？ 大著だが、親鸞伝に関しては玉日姫の存在を否定し、親鸞が関東で妻帯した、など
1922	中澤見明（けんみょう）	史上の親鸞	発表の早い下記の長沼賢海に次いで、親鸞伝の史実性を疑問視した研究。親鸞の妻帯については、吉水時代妻帯＋妻三人説
1923	鷲尾教導	恵信尼文書の研究	恵信による書簡の発見者（新潟出身）による紹介と分析
1928	長沼賢海	日本宗教史の研	実証主義的見地から親鸞の越後配流をも疑問視し

		究	た、先駆的な研究（該当部分の初出 1910 年）。著者は新潟出身
1931	日下無倫	真宗史の研究	実証主義的姿勢の大著だが、越後時代の親鸞については記述がきわめて少なく、“自行”などと位置づけるのみ
1934	山田文昭（ぶんしょう）	真宗史稿	実証主義的に越後時代の親鸞に取り組むため、高田正統伝などの伝承を否定する一方で恵信の書簡を重視し、越後時代の親鸞を“沙弥”と位置づけ、恵信を善鸞の母でないとするなど
1935	山田文昭	真宗史の研究	上とほぼ同だが、他に恵信を越後国府近辺の出生とする
1936	藤井慧真	越後の親鸞聖人と其伝説	新潟出身ハワイ在住の真宗僧が、新潟県内の親鸞旧蹟にまつわる伝承を考証した小冊子。学者でないため、伝承を適度に顧慮
1938	藤原猶雪（ゆうせつ）	真宗史研究	配流の遠因に吉水時代の妻帯を求め、恵信を越後時代の後妻と見る、妻三人説をとる
1948	山田文昭	親鸞とその教団	恵信書簡により、親鸞の越後在住期間を 7 年とする初見か（その部分の初出は 1928、なお本書は遺稿集）
1951	梅原隆章	親鸞伝の諸問題	沙弥としての親鸞の妻の数について既存の研究を批判し、妻は恵信一人で彼女を越後出身とする。なお、善鸞義絶の伝の背景に高田派を想定するなど、本願寺中心主義的か
1956	藤島達朗	恵信尼公	越後時代の親鸞については、今の居多が浜に上陸した、恵信との結婚は越後においてであった、などと推定する小冊子
1956	宮崎圓遵	親鸞とその門弟	これも小著だが、新潟の郷土史ではよく典拠とされる。越後配流について妻帯に因を求める説を否定し、恵信との結婚を越後で、かつ再婚とする。また恵信も常陸から上洛したとする
1957	笠原一男	親鸞と東国農民	善鸞を含む東国教団とその基盤がテーマ。配流については恵信との結婚を重視し、彼女の実家が三善氏であったことが東国移住の契機となったとする、中沢・山田・藤島説を支持

1957	梅原真隆	恵信尼文書の考究	恵信の書簡を初めて現代語訳し、注釈と研究を付したもの
1958	日下無倫	総説親鸞伝絵	配所での親鸞につき、高田正統伝を否定し教行信証や恵信の消息により再考するも、"自行"との位置づけは前著と同。遺稿集
1959	梅原隆章	真宗史の諸問題	旧著に続き親鸞伝を包括的に再考。越後で恵信と初婚、彼女を連れて帰洛、などは前著と同。“とひたのまき”も考証
1959	松野純孝	親鸞―その生涯と思想の展開過程	これも包括的な親鸞研究で、恵信上洛説も同。親鸞の越後配流に伴う生活上の必要から結婚したとし、山寺薬師を恵信の実家三善氏と関連づける。“とひたのまき”についても考証。著者は新潟出身で、本書刊行後に上越教育大学長になったこともあり、今でも地元でしばしば引用される（ゑしんの里記念館の展示他）
1960	細川行信	親鸞の史跡と伝説	著者は宗門の研究者だが、本書は“新しい巡拝案内”と題され、国府近辺では光源寺・五智国分寺・小丸山別院・浄興寺につき解説
1961	赤松俊秀	親鸞（人物叢書）	啓蒙書だが情報量多い。配流地の越後国府を上越市とするなど
1965	笠原一男	親鸞研究ノート	越後の親鸞については、恵信との結婚を二度目とし、彼女を越後の土豪の娘とし、関東移住の背景もそこに求めるなど
1968	宮地廓慧	親鸞伝の研究	親鸞在京時初婚説で、恵信とは越後で再婚と推定
1968	井上鋭夫	一向一揆の研究	西本願寺国府別院成立の前提を近世における高田瑞泉寺などの活動に求めると共に、板倉周辺の山寺などの宗教環境を渡りタイシと結びつける。著者は本書刊行時、新潟大の教官であった

５．親鸞の越後配所にまつわる記憶の確立（1960 年代から現在に至る）

以上のような新潟の郷土史家に親和的な敗戦後の真宗史動向に対応する動きとして、地元の郷土史について目を向けたい。まず、恵信の研究家として戦前から活動していた白銀賢瑞（しろがねけんずい）（1887－1968）について見る。

白銀は青野（後の直江津町･市、今の上越市）生まれで戦前から寺院住職・小学校教諭の傍ら考古学に興味を持ち、1934 年に『柿崎町史』の編集に従事した辺りから本格的に郷土史研究に傾注した。その後は、「寺務の傍ら恵信尼の研究に没頭した」[9]というが、この件に関しては新井の北部を恵信終焉の地に認定し、「頑固なほどに自説に固執」[10]したという、必ずしも肯定的とは言えない評価となっている。

ともあれ、本稿は恵信関連の問題を扱う余裕がないので、越後時代の親鸞に限定して白銀の議論を概観するにとどめたい。

彼は、親鸞の上越における弟子とされる覚善（今の高田・安養寺<大谷派>の祖）が、親鸞が東国に発した時、栄部の草庵を賜ったとされるが、それが今の国府別院の前身と考えられるので、国府別院こそが親鸞の越後における唯一の旧蹟である、とする（白銀 1952）。

また、覚如が親鸞の配所地に比定した越後国府・国分寺の旧地を、喜田貞吉や黒板勝美の考証および僧・萬里の『梅花無尽蔵』などに拠りつつ、国府は直江津一帯の丘陵地、国分寺は海中埋没説を唱えた（白銀[1952][1954]）。

さらに、直江津の本願寺派真行寺に所蔵されている、同寺の元禄頃の住職が著した『御伝鈔改補照蒙記』の内容に、おそらく初めて注目した（白銀　1954）。

以上のような白銀ら地元の郷土史家の議論を前提として、親鸞の上越における配所に関して 1960 年代後半から 70 年代に集中的に自説を発表したのが、平野団三（1905－2000）であった。彼は、真宗寺院の住職であった白銀と異なり、中頸城郡の小地主の家に生まれたという。10 代末に樺太に渡り、当地で国民学校に教員として奉職し、郷土史研究は敗戦後に引き揚げてきて以降であったとされる[11]。なお、文献資料に傾注する郷土史家というより、元々は石仏など仏教美術史を専門としており、1960 年代前半に行われた新潟県教育委員会の頸南（中頸城郡の南部）学術調査の報告書では、石仏について執筆していた（新潟県教育委員会 1966：327-342）。

とはいえ、彼は1960年代後半に越後時代の親鸞について矢継ぎ早に発表した五本の論文と、それらをまとめて 1970 年代に刊行した三つの著作（うち一作は共著だが、平野が中心的な著者）により、この分野の最前線に躍り出た人物である。ちなみに各論考には反復が多い一方で、微妙に見解が変わっている細部もある[12]。

平野の当該問題についての主張は、大凡以下の通りである。まず、白銀など旧来の郷土史家にも知られていた史料である、直江津真行寺蔵の『御伝鈔改補照蒙記』にはじめて本格的に取り組み、その主張に基づいて親鸞の越後における配所を竹ノ内草庵と竹が前（竹カ前、竹ガ前）草庵と認定した。

さらに、史実上の親鸞を監視した代官・荻原民部敏景という人物が実在したと断定したうえで、前者をその者の屋敷（館）があった中（館の内）、後者をその前、と解釈し、この文書が主張するように親鸞が最初に留まった竹ノ内が「狭キ」という理由により、竹ガ前に移ったとする。もっとも、同史料は元禄 6 年（1693）作とされており、平野は「この二つの親鸞配所を記した最古の文献」（平野 1979：238）と位置づけているが、本稿で先に参照した宗誓作『御直

弟諸国散在記』（1694 年刊）のわずか一年前に過ぎないので、「最古の」ソースとして自らの立論を正当化する根拠とするには、やや疑問が残る。

また、平野は高田安養寺関連文書（実際には、長野県の別の寺院に所蔵されているもの）における覚善関連の系譜資料に注目する。覚善は、上越市高田地区に現存する大谷派安養寺の開基と伝えられており、その観点から白銀賢瑞も注目していたのは上記の通りであるが、平野は『親鸞門侶交名牒』に「覚善　越後国々府住」と記されている人物であることから、親鸞の越後時代で唯一の門侶と位置づける。

この覚善につき平野は、安養寺が一時退転していたという長野県水内郡の寺院に所蔵されていた関連文書を探し出し、その中から安養寺の系譜など複数の史料により、問題の初代覚善が、親鸞配流時の越後国府における代官だったと彼自身が認定した荻原民部の娘婿で、俗名が蔵之助であったことを導いている。さらに平野は、安養寺文書に後の配所地として名の出る平岡――当該文書には、「栄部ノ地タル平岡ニ新殿ヲ建築シ移シ奉リ世尊ノ如ク朝夕御給仕申上ル」とある――について、五天良空の正徳３年（1713）刊『親鸞聖人正統伝』（平松令三 1975：339）を参照し、同テキストで「民部年景」が「聖人タタイマノ謫居ハアマリニ狭小ナリ」との理由で国分寺の東南に移したとされている地名「平岡」とも対応することから、現在の国府別院の地である小丸山を指すものだとしている。

この安養寺文書の発見と『正統伝』の地名の件により平野は、親鸞は配流されてしばらくは荻原民部の屋敷（館）の中、竹ノ内草庵に流謫の生活を送っていたが、その娘婿である蔵之助という門侶ができ、彼は義父である民部敏景とはかって親鸞を平岡の地、すなわち現在の小丸山に移すことにした[13]、というストーリーを作り上げたのである（平野[1967][1969b][1971a][1971b]）。

ところが、平野も参加した上述の頸南学術調査により、田中圭一や井上鋭夫らが越後国府の地をヨリ内陸（南）寄りの板倉辺りに求めるようになった[14]。もしこの越後国府板倉説が正しいとすると、現在の五智国分寺の場所にあった竹ノ内草庵に親鸞がしばらく蟄居した後、現在の国府別院の地へと継承される竹ガ前草庵に、親鸞が荻原民部とその婿であった覚善の配慮で移り住んだ、という平野説が成り立たなくなってしまう。

おそらくそのことを勘案して平野は、越後国府板倉説が井上らによって主張され始める 1966, 7 年以降、親鸞の聖教類に海の字が多いのは配所であった越後国府が海辺であったからだとか（平野 1969b）、高田専修寺蔵・親鸞伝絵における越後配流の図が現在の国府別院周辺の地形に一致しているとか（平野 1971a）、屁理屈のような立論で竹ノ内・竹ガ前の両旧蹟に固執することになる。とはいえこの二点とも、現在の巡拝あるいは観光案内としての両旧跡の解説で援用されることが多い表現となっている[15]。

以上の点により、1960 年代後半から 70 年代にかけての平野の言説が、越後配流時の親鸞配所に関わる記憶として次第に一般化するに至った、と評価することができよう。

ちなみに、1980 年代から 90 年代にかけて、文献史の観点から国府頸南説を否定する井上慶

隆[1988]、また考古学から越後国府を上越市直江津地区に求める坂井秀弥[1983][1993]や金子拓也[1996]の研究が出され、1960 年代後半に田中圭一や井上鋭夫らが主張した越後国府頸南説は急速に旗色が悪くなってしまった。これは平野の言説それ自体とは全く関係がないものの、上記したような平野による竹ノ内・竹ガ前という両配所についての位置づけが、これ以降、正統的な記憶として確立したことの背景の一ではあろう。

このことの証左として本節の末尾に、最近の代表的な祖跡案内書を引用しておく。

> 五智国分寺：（前略）この地はその当時、越後国府で郡代を勤めていた荻原民部敏景の館のあった所で「館の内」が「竹の内」になったものと考えられています。（上野實英 2007：22）。
>
> 本願寺国府別院：親鸞聖人が、御流罪二年目から恵信尼公と生活されたといわれる「竹之前草庵」があった所と伝えられています。親鸞聖人が関東へ赴かれた後、竹之前草庵を相続したのが親鸞聖人門侶交名牒にある覚善とされています。（後略）（上野實英 2007：24）

６．まとめ

以上、直江津における二箇所の親鸞配所として五智国分寺と国府別院が確定してくる経緯を追ってきた。現在、観光案内や祖跡巡拝記などによる説明で常套化しているのは、前者は親鸞が居多ヶ浜に着岸してから一年余り留まった竹ノ内草庵を継承しており、後者は親鸞が恵信との結婚生活を送るために、現地代官とその婿覚善によって配慮され移転した竹ガ前草庵の跡地である、という物語化された記憶[16]である。

1990 年代以降、記憶やコメモレイションに関して凡そ以下のように位置づけられてきたと思われる。とくに近代以降のコメモレイションの場合、国民国家形成の何らかの必要、例えば国民統合の要請によって、それに与すると期待される記憶が公共的なものとして想起され、そうした公共記憶を形式化して記録するため、何らかのコメモレイション（造塔・造碑、あるいはそれに付随する記念・顕彰行事など）がなされた、という風に。

今回の事例でも①から⑤の旧蹟に像・石碑が作られ、一部は明治以降の造像・造碑であったが、そうしたコメモレイションがその時々において期待された記憶を形にするためであったとしても、それら個々と上記のような共有化された記憶とは明らかに断絶がある。

本事例の場合、まず 17 世紀後半から 18 世紀にかけての『御伝鈔』注釈書や親鸞伝の刊行ブーム、また二十四輩を含む祖跡巡拝のブームの中で、宗誓ら祖跡巡拝をライフワークとした著述家によって竹ノ内・竹ガ鼻なる両配所の記憶が、直江津に関して生成した。もっとも、宗誓の親鸞伝から数十年後の先啓作『大谷遺跡録』に見られるように、篤信の門徒であるならこの両配所だけではなく、近隣の光源寺や高田の浄興寺・本誓寺[17]にも参詣すべきことが推奨されていたように、直江津から高田にかけて祖師にまつわる旧蹟群が、既に巡拝対象としてグループ化されてはいた。

20 世紀に入って宗門内の実証史学により、そうした旧蹟に関する史実性が一度は全否定され

る。ところが、1921 年にいわゆる恵信尼文書が発見されたことにより、真宗史学者が敗戦後にかけて再び越後時代の親鸞に目を向け始め、郷土史家たちもそれに影響を受けて探求を始めた。後者の上越における[18]代表格が白銀賢瑞であり、平野団三であった。

とくに平野は、自らが調査した直江津の真行寺文書と高田の安養寺文書、および良空の『高田正統伝』における記述を巧みに結びつけ、親鸞が当初は代官の館の中で手狭な竹ノ内草庵に蟄居していたが、やがて代官荻原一族に尊崇されて平岡（小丸山）の地に竹ガ前草庵を贈られ、そこで恵信と暮らした、という物語的なストーリーを独自に作り上げた。

こうした平野の親鸞像が正統的な記憶として確立するには、さらなる要因が必要であった。1980 年代から 90 年代にかけて越後国府と国分寺を直江津に求める考古学や文献史学の学説が有力になったこと、また平野が在家出身であったため宗派的な利害の代弁者ではなかったことも、文化財ー観光行政がその説を受容する際プラスに働いたと考えられる[19]。

ともあれ本事例においては、親鸞の越後配所にまつわる記憶の確立が以上のような複合的な要因に拠っており、かつ最も重要だったのが、一郷土史家の執念深い自説の探求と主張であった。

【註】

1) 例えば、阿部安成ほか[1999]、羽賀祥二[1998]、高木[1997]を参照。このうち、近世の史蹟論が羽賀著書、国民国家形成と関連づける左派的な傾きのコメモレイション論が阿部らの共著書である。高木の著作はコメモレイションそのものを主題にしてはいないが、やはり左派的な観点から国民国家の形成と天皇制に関わる文化事象の顕彰との連関をテーマとしている。

2) 例えば、二十四輩の巡拝記として最も流布したと考えられる了貞の『二十四輩順拝図絵』（享和 3・1803 年銘の自序あり）を参照。細川行信[1974：806]

3) 旧称・小丸山別院である国府別院の起源は、現在の愛宕神社（もとは天台宗・愛宕別当宝持院）の朱印地だった当地に、高田（上越市）の本願寺派・瑞泉寺らが宝持院や五智国分寺と交渉し、延宝 9 年（1680）に石灯籠を建立したのが始まりとされる。この顛末については、一向一揆研究の一環として井上鋭夫[1968：33-37]が紹介して以来よく知られているが、筆者も井上とは別の史料に基づいて位置づけたことがあった（由谷 2008：113-114）。

4) 例えば、リーフレット『文化財でめぐる゛ゑしんと親鸞』には、それぞれ写真入りで、五智国分寺内の竹之内草庵について「親鸞が上陸後最初の住まい」、国府別院について「親鸞が竹之内草庵から移り、妻゛ゑしんと住んだ旧跡」とキャプションが付されている。

5) 親鸞越後七不思議のうち、上越地方に関係するのは居多神社や国府別院に関連して主張されることのある「片葉の葦」（葦さえも親鸞を崇敬して、片側を向くようになった）のみで、他の六所は下越である。この七不思議伝承の生成は本稿の守備範囲を超えるが、一つだけ指摘しておきたいのは、親鸞が当初上越の居多ヶ浜に着岸して一年ほど当地に留まった後、鳥屋野をはじめとする下越地方に教化の旅に

出かけた、とする語り口の近世親鸞伝が存在することである。例えば、『康楽寺白鳥伝』（真宗史料刊行会 2007：44）を参照されたい。

6) 例えば、引用文で中略とした部分には、五智国分寺の竹之内草庵内に安置されている木像が真実の御影か否かについて、江戸で開帳した時の顛末が傍証として記されているが、当該草庵を史実上の親鸞配所と見なす論旨とは無関係である。また、これらテキストほとんどの刊行は、1263 年に亡くなった親鸞の御遠忌とも直接の関係を見いだすことができないであろう。

7) このうち先啓については、著作の一である『御伝絵指示記』（平松令三 1975：441）に、「元文元年予十七歳、初テ高祖ノ御伝ニ就テ種々ノ異説アルコトヲ知テ、其正説ヲ糺サンコトヲ志シ、諸国ニ飛錫シテ、記録ヲ尋ヌ」云々とあることから、祖師の旧蹟を訪ね歩くことをライフワークとしていたことがうかがえる。なお、宗誓や先啓については、塩谷（えんや）菊美[2004]の 122、164，177、196、217，224 頁などでも議論されている。

8) 実際に、平野団三や大場厚順らが参加した『頸城文化』29 号（1970 年）の座談会「親鸞の妻　恵信尼」の中で、平野ら地元の郷土史家たちが言及している敗戦後の真宗史学者は、藤島達朗（33 頁）、赤松俊秀と宮崎円遵（36 頁）、松野純孝（37 頁）、梅原隆章（43 頁）という、本文でとりあげた五人であった。（池田嘉一ほか[1970]）。

9) 『新潟県大百科事典　上巻』新潟日報事業社、1977、参照。

10) 中村辛一「直江津市人物列伝 白銀賢瑞」、『広報なおえつ』1968 年 12 月 1 日、参照。

11) 平野宏「父、団三のこと」、『頸城文化』51 号、2003、参照。

12) 例えば平野[1966：18-23]で、「配所は一つでなければならない」と主張し、荻原民部俊景の館である竹ノ内草庵を、いまの国府別院が位置していた小丸山台地であったと主張していた。これは、本文で先に述べた白銀賢瑞の見解を継承したものと考えられる。しかし、翌年以降の論考では、真行寺文書に国分寺内の「御敷地」に「一両年御坐ナサレ」とある記述をそのまま受け入れ、配流後しばらく「竹ノ内草庵」に蟄居していたが、後に竹ガ前草庵に移転したとする見解に変更している。

13) もっとも筆者は、本文で上記した直江津の真行寺文書に出る竹ノ内・竹ガ前という二草庵の記載および前者から後者に親鸞が移ったとする記述と、全く異なる文脈にある安養寺文書における覚善の記述とを結びつける平野の立論に、大いに疑問を感ずる。実際、安養寺の系譜は、親鸞が民部敏景や覚善の助力で後に移った草庵を「栄部ノ草庵」と称するのみであり、最初に国府へ着いた時の配所名は明記さえされない。それに、こうした系譜から史実を導こうとする姿勢自体が問題だろうし、『正統伝』における平岡も「国分寺ノ東南平岡ト云フ所ヲ点シテ舎居ヲ造リ」と記されるだけで、小丸山とは書かれていない。実際に現在の国府別院の地（小丸山）は現在の五智国分寺から南側には位置するが、「東南」ではない（概念図参照）。とはいえ、平野説の学術的な妥当性は本稿の守備範囲外であろう。

14) 田中圭一・山本仁[1967]、井上鋭夫[1968]。その後、井上が編纂した『新潟県の歴史』（山川出版社、1970）でもこの説が繰り返し主張され、井上が新潟大教官であったという権威も加わって、一時は越後国府・国分寺の頸南所在説がかなり定説化していた。

15) 例えば、大場厚順[1994：4-6]を参照。

16）本稿と視点は異なるが、物語と記憶について片桐雅隆[2003]が論じている。

17）浄興寺と本誓寺は、共に高田寺町に現存する。浄興寺派本山である浄興寺は、もと大谷派院家（いんげ）で親鸞の頂骨を保管すると伝え、本誓寺は下総磯部の勝願寺系列の伝を残し、近世に大谷派院家であった。両寺の由緒書については、由谷[2008]で検討したことがある。

18）白銀も平野も旧･中頸城郡の生まれであり、彼らのこの問題を巡る言説は、親鸞が配流された地、そして（本稿では触れられなかったが）恵信が晩年を過ごした地が同郡内にあって欲しい、というバイアスのある心情を起点としていたと考えられる。これは、郷土史という彼らがとったテキスト産出のスタイルと、まさに対応している。

19）平野は、1970 年代から上越市文化財審議委員であった。また彼が僧侶ではなく在家であったことは、本文で参照した観光案内類が全て上越観光コンベンション協会という行政サイドによる制作であることから、通説として採用しやすかったと推察できる。

【文献】（表に掲載した文献についての書誌情報は、註で参照されたもの以外省略する）

阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己（編），1999,『記憶のかたちーコメモレイションの文化史』柏書房.

塩谷菊美，2004,『真宗寺院由緒書と親鸞伝』法蔵館.

羽賀祥二，1998,『史蹟論』名古屋大学出版局.

Halbwacs, M. 1950 *La Memoire Collective*, P.U.F.（小関藤一郎訳），1989,　『集合的記憶』行路社.

平松令三（編），1975,『真宗史料集成』7（伝記・系図），同朋舎.

平野団三，1966,「親鸞聖人配所竹ノ内草庵と越後の法流」『越佐研究』24.

————，1967,「親鸞配所と門侶覚善の研究」『越佐研究』25.

————，1968,「恵信尼と上越後」『頸城文化』26.

————，1969a,「（仮説）越後国分二寺址論考」『越佐研究』28.

————，1969b,「親鸞・覚善・恵信尼と上越後」『日本仏教』29.

————，1971a,『越後と親鸞・恵信尼の足跡』柿村書店 [→増補改訂 1972 年、第 3 次改訂 1992 年].

————，1971b,「越後と親鸞・恵信尼の足跡」国府教区記念事業編集出版委員会（編）『越後親鸞と恵信尼』永田文昌堂.

————，1979,『越佐と謎の石造文化』，新潟日報事業社.

細川行信（編），1974,『真宗史料集成』8（寺誌・遺跡），同朋舎.

池田嘉一・大場厚順・中戸賢亮・中村辛一・平野団三 ，1970,「(座談会)「親鸞の妻　恵信尼」『頸城文化』29.

井上慶隆，1988,「親鸞配所越後国府の所在について」新潟仏教文化研究会（編）『なむの大地』考古堂書店.

井上鋭夫，1968,『一向一揆の研究』，吉川弘文館.

金子拓男，1996,「越後国分寺の寺地の所在とその変遷について」『新潟考古』7.

堅田修（編），1977,『真宗史料集成』2（蓮如とその教団），同朋舎.
片桐雅隆，2003,『過去と記憶の社会学』，世界思想社.
長沼賢海，1928,『日本宗教史の研究』，教育研究会.
中澤賢明，1933,『史上之親鸞』，洛東書院（初版は 1922 年、文献書院刊）.
新潟県教育委員会，1966,『頸南　中頸城郡南部学術総合調査報告書』，新潟県教育委員会.
大場厚順，1994,『越後の親鸞』，新潟日報事業社.
坂井秀弥，1983,「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討－越後国分寺比定地の一例―」『新潟史学』16.
————，1993,「上越市今池遺跡国府説・本長者原廃寺国分寺説の現状」『新潟県考古学談話会会報』11.
新編真宗全書刊行会（編），1975,『新編真宗全書　史伝編』3，思文閣.
真宗史料刊行会（編），2007,『大系真宗史料　伝記編』3（近世親鸞伝），法蔵館.
————，2008,『大系真宗史料　伝記編』4（御伝鈔注釈），法蔵館.
真宗典籍刊行会（編），1976,『真宗大系』31，国書刊行会.
白銀賢瑞，1952,「親鸞聖人の越後の居緒は果して流罪なりしか」『頸城文化』2.
————，1954,『直江津町史』同町役場 [→文献出版より 1975 年に復刊].
高木博志，1997,『天皇制の文化史的研究』，校倉書房.
田中圭一・山本仁，1967,「越後における親鸞と恵信」『越佐研究』25.
上野實英，2007,『上越後の親鸞聖人』，北越出版.
由谷裕哉，2008,「磯部六ヶ寺の伝承：北信・上越の浄土真宗寺院グループを巡って」『北陸宗教文化』20.

（よしたに　ひろや　小松短期大学地域創造学科）